文学の杜

仙台文学館友の会会報

第57号

平成30年7月20日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）

〒981-0902

仙台市青葉区北根2丁目7の1

電話　022（271）3020

仙台文学館のホームページ

http://www.sendai-lit.jp/

平成30年度 文学館友の会 総会

新しい事業の提案

ゴールデンウイーク中の5月3日10時から文学館友の会総会が開かれた。

総会は友の会事務局の伊藤美菜子さんの司会で始まり、会長渡辺祥子さんが挨拶のあと、議長に就いて議事が進められた。平成29年度の事業報告、収支決算報告、監査報告がなされいずれも了承された。その後平成30年度の事業予定案が示された。文学散歩は年に一回にして、新しく、友の会独自の文学講座を設ける。7月上旬予定の文学散歩については古川にある「吉野作造記念館」に決定。予算案のうち会費収入予算額は会費2500円×170名として前年と同じにした。事業予定案、予算案とも原案通り承認された。

最後に役員、サポーターの紹介があり、次の顔ぶれで友の会の運営にあたることになった。

▽会長　渡辺祥子▽副会長　寺嶋信▽幹事　一文字ひろみ、尾形光子▽監事　近田裕子、長沼和子▽サポーター　池田ミチ、加藤裕子、坂田久子、佐藤満子、佐野のぶ▽事務局　伊藤美菜子

議事終了後、参会者全員の自己紹介と自由な話し合いに移った。仙台文学館ってどこにあるのかと探すことから始まった人（分かりにくい所に建っている）。友の会活動活性化のための会員増を語る人。事業の日程、曜日の再考などをあげる人もいた。読書会については感想を述べ合う会にしているのでぜひとの勧誘があった。

総会が終わってから、特別展「田沼武能写真展　時代を刻んだ貌」をみて学芸員の解説を聴いた。出席者は17名。

20周年に向けて、心新たに

会長　渡辺　祥子

日頃は友の会の運営に対しご理解とご協力を賜り、ありがとうございます。仙台文学館は来年開館20周年を迎えますが、同じようにこの友の会の活動も20周年となります。

歴代の役員、会員の皆さんの思いや営みが確実に積み重なり、今を支えていることを実感し、大切に受け継いでいかねばと強く思います。と同時に、20年は伊勢神宮の式年遷宮のように、全てをまっさらにしてもう一度スタートさせる、そんな大きな節目でもあります。これまでの積み重なりの上にあることを深く認識しながら、未来につなげる活動を、ここからまた新たに始めていく使命も担っているのだと感じます。

派手なこと大きなことは出来ませんが、仙台文学館の友の会だからこそ、友の会ならではの活動を、役員の皆さんと共に企画して参りたいと思います。

会員の皆様には、今後も様々なご意見をお聞かせ頂き、楽しい友の会活動を一緒に続けて行けましたら幸いです。今年度も、どうぞ宜しくお願い致します。

文友一滴

この頃歩くことが多くなった。そうすると街中に暮らしていても、花たちは風の中の香りで季節の移ろいを知らせてくれます。でも最近蝶々を見かけなくなったなと思いませんか。フッと「モンシロチョウのタマゴ探しています」という話を思い出しました。探していたのは仙台市立広瀬小学校でした。学校の花壇にキャベツを植えてモンシロチョウを呼んだのに、さっぱり来てくれない。理科の教材にしたいので「家庭菜園などでタマゴに気付いた方、ご連絡ください」ということでした。あら、広瀬小学校の辺りでもそうなんだ、と驚いたものでした。　それは、もう随分と前の出来事です。

仙台市は「生きもの認識度調査」を実施しているのだそうです。調査の対象はカブトムシ・クワガタムシ、ホタル、トンボ、モンシロチョウの仲間、アゲハチョウの仲間、セミ、ウマオイの鳴き声、カッコウの鳴き声、ツバメ、川や池の魚、カエル、タンポポです。平成27年度のそれによれば、前回より認識度があがったのはツバメだけという結果でした。これは実際の数ではなく、私たちが気にしているかどうかの調査です。なんだか「鈍感になっていませんか」と問いかけられたような気がします。

それでも、街路樹の根元の小さな草の花たちは、元気なかわいい自己主張で、その存在を訴えています。春の訪れを告げるのはオオイヌノフグリ、別名は瑠璃唐草、天人唐草、星の瞳。瑠璃唐草に一票かな。唐草から連想されるとおり帰化植物なんですね。次に咲き出すのは、タンポポとヒメオドリコソウかな。すっと首を伸ばして咲くタンポポはプリマドンナ、風に吹かれて揺れるヒメオドリコソウは、背丈までそろって、なんと優雅なことか。彼女たちほど目立たないけれど、スズメノカタビラもイチゴツナギも花を咲かせる。今年はカラスノエンドウが元気です。でも七夕の直前に、彼女たちは一斉に姿を消してしまいます。私には、残された街路樹が寂しそうに見えてしまいます。

（和）

友の会随想

花火

友の会会員　菊地　長子

夏も、もうすぐおわりになる旧盆の頃、夜になると「ドーン、ドーン、バンバン」と、どこからともなく花火を打ち上げる音がする。私はじっとしていられなくなり、あわてて二階にかけあがる。窓を開け、どの方向だろうと音のするほうを確かめる。家々の屋根と、最近多くなったマンションであまり見えなくなったが、それでも近いところで行われている夏祭りの花火は見ることが出来る。バンバンあがってのち、しばらくすると音がしなくなる。もうおわりかなと階段を降りかけると、また音がきこえてくる。あわててもどり、窓から身をのり出す。夜空がパッとあかるくなり、大輪の花をさかせるような、私自身も花火と共に空に舞い上がるような感じになる。そしてしばらくうっとりする。

大曲の花火大会には三回も行った。一回目は二十年前、どうしても行ってみたく一人でツアーに参加した。自由見物だったので一人でどこがいい場所かとさがしていたら昼花火があがり紫のけむりが空にかけあがっていた。夜、あたりが暗くなり、川一面に花火が打ち上げられ、あまりの迫力に圧倒された。二回目は勤めていた職場のOB会で、秋田の方が計画してくれ、新幹線で行き桟敷席でおいしいお弁当つきだったが、遠方から参加した仲間がすごい花火の音の中、居眠りをしているのにはびっくりした。三回目は夫とツアーに参加した。この時は雨あがり、桟敷席だったがびしょびしょで、おまけに帰りはバスの乗り場までかなり歩いた。

夏の夜、庭にろうそくとバケツを用意し、線香花火をする。巻紙の先に火をつけると「パチッ、パチッ」と私の手もとで火花が飛び散る。グルグルまわすとたましいのまばたきのような私だけの世界。

大曲のような花火よりも、我が家の階段をのぼったり降りたりしてみるささやかな花火のほうが私は好きです。

第35回読書会

本性がむき出しになった時、なにが

「写真家」ダフネ・デュ・モーリア

ヒッチコック監督の映画「鳥」の原作者でもあるモーリアのミステリー短編である。

広大な地所、大きな城、かしずく召使たち、そうした日常を離れ、夫をパリに残して、美しい侯爵夫人は海辺のホテルで休暇の日々を過ごしている。どこにいても称賛のまなざしに囲まれるが、彼女は少しも満たされず、ちいさいふたりの娘たちを家庭教師に任せて、退屈な時間のつながりの中にいるのだった。

写真撮影がきっかけで、夫人は足の悪い街の写真家と親密になる。やがて二人は、彼がいつも写真を撮りに行く崖の茂みの中で、密やかな情事の時を持つようになる。

バカンスの間のなぐさみと考えていた夫人に、男はある提案を持ちかける。その時自分を守るために夫人が取ったとっさの行動は、その後思わぬ方向へと動き出すのだった。

「夫人は何の感情も持たず、自分の思い通りになると思っている人」「人を傷つけて平気な人」「自業自得」など夫人に対する非難の声が続出した。「死・病・退屈・孤独などサガンの作品に共通するものがあった」「男と女の解決しがたい切実さが見えてこない」との声や、「配役まで考えて、映画を観るように読んだ」と、たのしい意見も出された。

4月11日、新会員2名を迎えて11名出席。

（佐）

第36回読書会

遠い日、少年の葛藤の果てに

「四十一番の少年」井上ひさし

作者本人と思われる橋本敏雄が児童養護施設に入所したのは、中学三年の春である。同室の少年は高校を卒業したばかりの昌吉だった。細い目、鋭い視線、鞭のようにしなる手、素早く飛んでくる平手打ち、この昌吉に逆らうことは決してできないのだと、敏雄は入所一日目にして悟るのだった。

強いものに媚びへつらうことで、弱いものはその身を守るしかない。敏雄の従順は、やがて昌吉の起こす恐ろしい誘拐事件の片棒を担ぐことへと流されてゆくことになる。

終戦後の混乱期に多くの孤児を収容した施設の実態は、おそらくこの小説から遠いものではなかったと思われる。実に重く、暗く、悲しく、辛い物語である。

現在起きている幼児虐待やスポーツ界のパワーハラスメントなど、全ては大人の愛情に係るもので、今もこの頃と何も変わっていないのではないかという感想が多い。施設の子どもを養子にした親族の体験談も出て、この日の読書会は話題沸騰、時間を越えてもまだ話し足りない雰囲気だった。

6月13日、12名出席。

（佐）

◇　◇　◇

次回読書会は10月10日㈬14時

藤沢周平「逆軍の旗」（文春文庫）

※友の会会員は自由に参加できます。

申込みは友の会事務局まで。

7月3日、午前9時にしては強すぎる日差しのなか、定刻にバスは出発した。参加者は15名、目指すは古川市「吉野作造記念館」だ。

常設展示室は、大正浪漫を思わせる照明と壁面の造作がなされていた。最初に「我らが同時代人 吉野作造」という映像を鑑賞した。

その後、記念館小嶋研究員の年譜に沿った解説に聴き入った。それはユーモアに富み、静かな情熱が伝わってくるものだった。吉野作造が、教科書で目にした記憶の人ではなくなった。大正デモクラシーも民本主義も、テストのための単語ではなく、意味を持った言葉として刻み込まれた。そういう不思議な時間を体験した。

その中に、井上ひさし名誉館長のエピソードがあった。吉野作造と井上ひさし、2人は、今の宮城県仙台第一高等学校の先輩・後輩という関係だ。『吉野作造記念館だより』第4号の、井上ひさし直筆の校正の原稿を見せていただいた。そこには『先輩に吉野作造と真山青果がいる……吉野作造だったらこの場合どう考えるか、ということを折りに触れ考える。そういうふうに気にして生きています』とある。そんな井上氏は吉野作造と弟・信次の評伝劇『兄おとうと』を執筆する前、記念館に入り浸ったそうだ。その時に作り上げた『吉野作造年譜』が、記念館にも仙台文学館にもある。それは何故か。

「井上ひさしはコピーが好きだったから」だ。小嶋さんは微かに笑いを浮かべて話された。2つ並べて見てみたいと思った。

見学の後は昼食会だ。美味しい料理と見学の充実感で、話の途切れる暇もなかった。

帰路の話題から1つ。記念館には職場体験の中学生がいて、私たちの見学に同行した。解説を聞き、展示を見ながら真剣に話し合っていた。その姿に「今日ここに来たもう一つの意味」を感じたと、しみじみと語り合った。

文学散歩の帰路には、いつも満足感と高揚感が満ちている。同好の士と充実した時間を過ごす、そんな体験をしてみませんか。

（和）

吉野作造記念館での記念撮影

文学散歩

「吉野作造記念館」を訪ねて

生誕140年　それからの時を思う

第21回 ことばの祭典

仙台文学館主催の、第21回「ことばの祭典―短歌・俳句・川柳へのいざない―」が6月17日開かれた。

応募作品数は、短歌部門95点、俳句部門97点、川柳部門94点が寄せられた。吟行会の課題は「川」または「書く」。

賞はことばの祭典賞、選者の特選・秀逸・佳作、参加者が選ぶあじさい賞。小池光館長賞。

《ことばの祭典賞》

◇短歌の部

皂莢川（サイカチガワ）の橋をわたりて通いたる老人ホームの母との十年　渋谷康子

◇俳句の部

川音が子守唄なる蛇苺　太田サチコ

◇川柳の部

昭和史をめくると黒い川がある　小野正光

《小池光館長賞》

◇短歌の部

ふるさとに川ふたつあり澄川にも濁り川にも蛍とぶころ　古川陽子

◇俳句の部

天の川跡取りの無きこけし店　土生博子

◇川柳の部

昭和史をめくると黒い川がある　小野正光

特選、秀逸、佳作、あじさい賞の受賞者は次の人たち。

〔短歌の部〕▽**栗木京子選**（特選）小林恵子（秀逸）島邦生、松本雄治（佳作）渡邊とり、畠山みな子、土生博子、柴田つや子、今野安夫▽**佐藤通雅選**（特選）明石嘉夫（秀逸）石垣弘子、三浦真弓（佳作）佐藤岩男、大森藍、水戸一志、加藤百合子、高橋優理恵▽（あじさい賞）佐藤岩男

〔俳句の部〕▽**北大路翼選**（特選）齋藤伸光（秀逸）白鳥光代、高橋道子（佳作）土生博子、仁多見千絵、及川真梨子、佐藤岩男、原愛樹▽**高野ムツオ選**（特選）仁多見千絵（秀逸）土生博子、鈴木仁（佳作）加藤鈴枝、高橋道子、阿部賢市、佐野享保、大森藍▽（あじさい賞）林静江

〔川柳の部〕▽**いしがみ鉄選**（特選）仁多見千絵（秀逸）山田純一、深谷実（佳作）佐藤岩男、神野礼モン、あきた・じゅん、渡邊とり、菅野實▽**雫石隆子選**（特選）木田比呂朗（秀逸）工藤吉生、あきた・じゅん（佳作）小野寺寿子、島文庫、島松柏、大浪つづ子、太田良喜▽（あじさい賞）島文庫

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今年も、友の会サポーターが、裏方スタッフとして参加し、受付での短冊配布、あじさい賞用の作品貼り出しなど、一日、文学館職員とともに、イベントの裏側を支えました。

私と郷土と文学 ⑮

中学生のとき、夏目漱石の『坊ちゃん』が、クラスで大流行したことがあった。「うらなり」「山嵐」などと渾名をつけ合って喜々としている。つられて読んで呆れてしまった。自分たちが生まれ育ちつつある松山が、味噌糞にくさされている。田舎、田舎者という言葉が随所に出てくる。なかでも嫌だったのが、悪戯をした中学生が、方言で、ぬらりくらりと言い逃れる場面。「なもし」という方言もまだ使われていた上に、そんな嫌な人は松山にはいないと断言できかねる現実もあり、さりとて、それは東京だって同じはずという思いもありで、平然とは読めなかった。

それから半世紀。「坊ちゃん」は、いまや松山観光の大立役者。蒸気機関車を模した観光路面電車「坊ちゃん列車」は、湯気の煙を吐きながら市内を巡っている。坊ちゃん団子に坊ちゃんビール。わずか一月余りで逃げ出したはずの松山に、坊ちゃんは結局、半永久的に囚われてしまっている。それというのも「あんたが、あんまり無鉄砲で面白かったからぞなもし」と揶揄したいくらいである。

昨秋、帰省していた私は、ふと『坊ちゃん』を文学として読み直してみたくなった。スーパーの片隅の本屋にもあったそれは角川文庫で定価二八六円。あまりの廉価さと、この一篇の小説の経済効果との巨大な落差に、いきなり、過ぎ去った歳月が虚実取り混ぜてなだれ込んで来るように感じられて、しばし、私は呆然としてしまった。

（西林久美子）

坊ちゃんと松山

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

文友の部屋

✽バスガイドさんが「宮城の方言知ってますか」と言って**もだら**をあげた。私の隣に座っていた妹が「**へそび**もあるよ」と、こそっと言って小さく笑った。いまやもだらを作る荒縄がない。へそびがないからもだらだって要らない。方言は早い勢いで消えていった。IT時代の今、何倍にも加速して新語が増えていく。（たわしとすす）

✽聖書の言葉に「だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」とある。子供の喧嘩のような復讐を禁じているのである。打った側からすれば、左の頬を向けられる態度は不気味に写るのではなろうか。この行為の深奥には、静謐だが激しい抗議の意志が含意されていると思うのである。（大泉）

「文友の部屋」の原稿募集

150字程度で、会員のみなさまの声をお寄せください。おススメの文芸作品や、映画・演劇などを見た感想などジャンルは問いません。イニシャルでの投稿も可です。

風と歩こう ⑥

Photo by Ryuji Sasaki

緑があんまりきれいで、用事が済んだ文学館からすぐ帰るのが惜しくなった。そうだ、台原森林公園へ通じる道を歩いてみようと思った。読書会の仲間たちが、その道のことを褒めるのを何度も聞きながら、実はまだ歩ききったことがなかったのだ。

「ひざしの杜」のテラスからのびる道を行くと、左手に「台原森林公園」と矢印が書かれた立て看板と、丸太縁の階段がある。急勾配の坂道を上がるのは息がきれたが、じきに平らな道になった。立ち止まって周りを見ると、しんとした空気に囲まれ、両側が太さを揃えたような松林だ。時刻はもうすぐ午後三時。折しも西日が射しこんで、林立するアカマツの幹に当っている。その木肌の赤色が鮮やかさをいっそう増すのが見え、木の名を改めて納得。目を離すのが惜しくなった。もっと早くに来ればよかったのに、いや今日がその日だったのだ、と内心でつぶやき、わずかに残る落葉を踏みながら歩き出す。

台原公園の合流地点に出て立ち止まっていると、目の前を、バッグを背負った若者がスマホを一心にのぞきながら、脇目もふらず横切っていった。（近）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第57号をお届けします。

▽かつて同じ職場で働いていたひとの朗読会「海鳴りの響きを聴く集い」に行ってきた。長いこと活動している。今回は戦時下の宮城学院―ミッション・スクール宮城女学校の苦難―が話されてから、動員学徒たちの声として感想文が朗読された。米朝の握手が本物であることを願った。（一）

▽昨今熱中症が増えた一因は、長年の冷房で人間の体温調節の発汗機能が不全になったこと、と専門家が言っていた。家族が求めるエアコン使用を、頑なに拒否してきた私は大得意なのだが、最近の異様な気温上昇ぶりでは、いつまでこの方針がもつか正直自信がない。（近）

▽「キウス周堤墓群」に行く機会があった。世界遺産登録を目指している、北海道・北東北縄文遺跡群の一つだ。国道沿いにあり、歩道は整備されているが原野の中だ。その規模に圧倒され、古代の人に思いを馳せていたら、奥から荒々しい人の声がした。急いで車に戻った。大自然の中で一番怖いのは人間か…（和）

▽歯ブラシは力を入れずにそっと小刻みにと、歯科衛生士の指導を受ける。しかしそれを守れずついゴシゴシと歯をこすってしまうのは、「みがく」ということばの持つ力によるのだろうか。鍋をみがく、タイルをみがくなど、やはりゴシゴシこすってしまう。「腕をみがく」は少し違うけれど。（佐）

この印刷物は再生紙を使用しています